



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第77号

2015年9月1日

東日本大震災被災地社叢復興支援事業

福島での調査に着手 5年間の事業継続に目処

梅田善美日本文化研究基金からの寄付を得て

社叢学会では東日本大震災発生直後から、被災地での社叢調査やアンケート調査、狐塚と八重垣神社の土壌改良、大杉神社新社殿地での植樹など、被災地での社叢復興に取り組んできた。今年はいよいよ5年目の事業最終年を迎えたが、事業の締め括りに向けて様々に模索してきた。

こうした中、梅田善美日本文化研究基金から事業支援の申し出をいただいた。用途についての指定はなかったが、梅田善美震災復興プロジェクトの実施を提案したところ、5年間に亘って支援を継続していただけることとなった。

これを受けて今年度は、これまでほとんど手つかずであった福島県の社叢調査を実施することとし、対象社叢を絞り込むための予備調査を、8/19～22の4日間にわたって実施、住民避難が続く地区も含め、28の社叢の情報を収集した。

今後、樹木の現況調査が必要な社叢を絞り込んだ上で、10月初旬に社叢インストラクターを現地に派遣し、樹木調査を実施する。また、昨年6月に植樹した大杉神社のオオヤマザクラの経過観察

と、大槌稻荷神社が計画している復興ボタン園の実現に向けての事前調査等の支援を計画している。

来年度については、これまでのデータとの比較のために、被災から5年が経過した社叢の現況調査を再度実施する予定。



山津見神社(飯館村)参道

人が住めない村、農地も放置されたまま。しかし参拝者のために山津見神社は開かれている

社叢インストラクター養成セミナー

11月に越木岩神社(西宮市)と枚岡神社(東大阪市)で開催

今年も社叢インストラクター養成セミナーは、関西で11月に開催されることになった。会場は、越木岩神社と枚岡神社で、今回は神社関係者の参加を目指して平日に開催する。

越木岩神社社叢は、隣地でのマンション建設による影響が懸念されている。今回は、服部保理事によるこの社叢の重要性についての講義を聞く他、こうした都市計画の進み方や、効果的な行政・事業主への要望・要請方法を、長年、都市計画に携わってきた糸谷正俊副理事長の講義によって学ぶ。

さらに、この社叢では増井啓治・社叢インスト

ラクターが社叢保全に取り組む地域住民と共に植生調査等を進めているが、今後の変化を見守っていくために必要な毎木調査や樹冠投影図作成などの実習など、より実践的な内容になっている。

枚岡神社では、井上満郎副理事長による社叢と歴史についてと、渡辺弘之副理事長の、そもそも森とは何か、神社と寺院の社叢に違いがあるのかなどについての講義を聞いた後、何度も地すべりをくり返してきた社叢管理に取り組んでいる濱上晋介・社叢インストラクター(同神社禰宜)の経験談を聞きながら、植生調査等の実習を行う。



社叢研究40年の成果 —照葉樹林研究—

講 師：服部 保(社叢学会理事・兵庫県立大学名誉教授)

原点は万博公園 照葉樹林の研究に取り組んで40年になる。原点は、大学卒業後に就職したコンサルタントで担当し大阪万博跡地公園の植栽計画の策定だった。照葉樹林を造成することになっていたが、大学では昆虫を専攻していたこともあり、照葉樹林がどういふものかも知らなかった。そこで、箕面の瀧安寺の調査をしたのが最初だった。

照葉樹林の分布と定義 照葉樹林は、東アジア、東南アジア、熱帯山岳、カナリア諸島、チリ、ニュージーランド、フロリダ半島等で見ることができる。国内では鹿児島、宮崎、南西諸島から北陸・東北まで広く分布している。常緑広葉樹林は、熱帯多雨気候に発生する熱帯雨林、地中海性気候に発生する硬葉樹林、中緯度地帯の常緑広葉樹林の3タイプに分類される。問題はこの中緯度地帯の常緑広葉樹林の名称で、照葉樹林、暖温帯林、ローレル林、温帯雨林など様々な名称で呼ばれてきた。1912年にまとめられた世界の植生の6体系でこれにあてはまるのは Laurilignosaで、直訳すればローレル林ではあるが、ローレル(月桂樹)は種の名前であり、これで植生の体系を表すにはふさわしくない。1930年に「照葉樹林」と和訳され、これに対しては批判もあったが、今では高等学校の教科書がこれに統一されている。そして、1953年には Lucidophyllous forest という英訳が与えられた。では、日本の「照葉樹林」と「ローレル林」は本当に同じものなのだろうか。カナリア諸島の森を実見すると、日本のタブ林と同じ外観をしており、これを「照葉樹林」と呼ぶのには何の問題もないことが確かめられた。

照葉樹林の分類 照葉樹林は光沢のある葉を持つ樹種が優占し、樹高20~25m、着生植物、腐生植物、寄生植物を多く含んでいる。日本では東北地方沿岸部以南の低山・低地で発達し、タブ型、シイ型、カシ型があり、神社や密教系寺院に孤立林として残されていることが多い。照葉樹林はその自然性によって、照葉原生林、社寺林に代表される照葉自然林、里山として利用されてきた照葉二次林、工場緑化、公害防止林に代表される照葉人工林に分類されるが、単に照葉樹林というと照葉原生林と照葉自然林を示す。

照葉原生林は人の手が加わっていない大面積の樹林で、種多様性が高く大径木が多い。林内には着生植物、腐生・寄生植物、大型つる植物が多くみられる。キナバル山(マレーシア)、ゴメラ島(カナリア諸島)、綾町(宮崎県)などがこれにあたる。

照葉自然林は人の手が多少入っていて、小面積で孤立化していることが多い。やや大径木が見られ、着生・腐生・寄生は少ない。太山寺(神戸市)、駒宇佐八幡神社(三田市)などがこれにあてはまる。

照葉二次林は、照葉林が燃料・肥料の供給料として利用されたもので、アカマツに還る里山とは違い、落葉照葉樹とアカマツが両立している。小径木の低

林で、アラカシ、コジイ(スダジイ)が優占種で多様性は低い。太平洋沿岸の温暖な地域に成立している。

照葉人工林は照葉樹の植栽による樹林で工場緑化林が多い。多様性が低く、一部の古い林を除いては小径木林である。こうした人工林は様々な樹種を植えない限り、多様性は高まらない。

なぜ照葉樹林は残ったのか 弥生時代に入ると、水田耕作と共に照葉樹林は燃料供給のための里山へと変えられていった。御蔵島も八丈島(いずれも伊豆諸島)も、南海の孤島でありながら、島内は全て二次林で、伐採して江戸に売却していたことがわかる。こうした中でなぜ照葉樹林は残ったのだろうか。そのヒントを万葉集に見つけた。ここでは神社も社も共に「もり」と詠まれている。これは、「神の坐ます森」「神を招じ入れるための依代」として森を保全したことを意味するのではないだろうか。神社の森は「自然との調和の智慧」の象徴なのである。「照葉樹林文化」という言葉があるが、これは照葉樹林が何らかの文化を生み出したということではなく、その自然観から森を残したこと自体が文化そのものではないだろうか。

孤立林としての社寺林 社寺林は従来、原生状態に近く、自然環境を反映した種組成を持つとされてきたが、社寺林は原生林ではなく、多少人の手の加わった孤立林であり、社寺林のデータを単純にまとめても原植生を推定することはできない。

兵庫県南東部(淡路島を除く)と宮崎県中央部における社寺林の照葉樹林構成種数と面積等の環境条件を調べてみると、小面積化によって種多様性が低下していることがわかるが、その要因としては立地条件の単純化が指摘できる。では種多様性を維持するためにはどれくらいの面積が必要なのだろうか。宮崎県を例にとると、全調査地面積17.7haに全出現種数は177種で、この種数を1ヶ所で生育させるために必要な面積数を計算すると、28haとなる。ということは、分担して保存する方が、面積が少なく済むということだ。

この種数・面積の関係を、100年前に植栽された照葉人工林と針葉人工林である宮崎神宮に当てはめてみた。面積は159千㎡で、林冠が発達しており、大径木も認められる。腐生ランもあるので一見すると照葉自然林とも思えるが、園芸植物が侵入していたり、着生植物相が単純であったりすることが指摘される。実際に宮崎神宮全体の種多様性を計算してみると、実際の種数が118種であるのに対して、計算式を適用すると、あるべき種数は159となり、面積の割に種数が少ないことがわかる。宮崎県の照葉樹林を比較してみると、宮崎神宮は種数、高木DBH、高木密度のいずれもが、二次林には勝っているが、自然林には劣っているという結果が出ている。結果として、100年間では十分な種多様性が確保できないということである。

照葉樹林構成種の定義・照葉樹林構成種の隔離分布と西日本偏在分布については61号参照(13年1月発行)



風景の生態学 飛騨古川の実証研究の例から

講師：廣瀬 俊介氏（ランドスケープデザイナー 風土形成事務所主宰）

（共催＝國學院大學環境教育プロジェクト（公財）ポーラ伝統文化振興財団）

1. 風景の生態学 本来デザインは、単に商業目的や作者の願望を満たすために形をつくることではない。だが日本では商業造形と誤解されていることが多い。ランドスケープデザインにおいては、表土を削り、地形をひな壇状に造り直す宅地造成技術が標準的に用いられ、地域環境条件から設計条件を十分に導き出せていない。近代米国由来の環境デザインは、都市環境の劣化への対処に始まった環境形成技術であり、19世紀の半ばにすでに、セントラルパークは地域の植生や気候を考慮して整備された。環境のデザインとは、風土の部分を作る技術と考えている。そのために地域の風土の理解が欠かせない。

風土は、自然とこれに則した暮らしや生業があって形作られてきた。同じ土地に生きる人々に共有される土地のイメージ、と考えられる。自然に則して田畑や屋敷や山道をつくることは、持続的な理想の環境デザインであった。しかし、生産者みずからが道や広場をつくらなくなって久しく、それらの部分を作る技術者が必要になった。それゆえ、風土の理解は以前より思考しなければならない。それは土地、ひいては風土の姿と目せる風景を読み解く先に行えると考えている。移りゆく風景を生態学的に読み解くこと、それを「風景の生態学」と表現してみた。

また、環境デザインその他の技術行使は、研究から独立させてはいけなないと、ことに東日本大震災以降考えるようになった。研究者であるとともに、技術者でもある私は、飛騨古川における技術の行使を、実証研究として顧みるにいたった。

2. 実証研究（飛騨古川朝霧プロジェクト） 飛騨市古川町は人口約1万5千人。宮川が流れ込む古川盆地と、上流には高山がある。以前ウキスキーのCFの舞台になったこともあり、日本の原風景とも言うべき美しい自然と、三寺詣りや古川祭なども盛んに行われ、豊かな文化の育まれてきた町である。

この風景は水の循環により形作られている。町中を流れる水の元をたどると、100日もの時間を経て山の根雪が少しずつ解け、地中に染み、川へ注ぐ。山がちな地表は平野部よりも多く水を蓄え、岩盤地の種類と形成年代によって、大地と気候に合った植物

の群れが生態系の礎を成し、彼らの遺骸から腐葉土層が出来て水を養う。水はその中の養分とともに植物の体をつくり、それを食べる生物の体をつくり、それを人が食べる。水路を流れる水は田畑を潤す。田の水は大地と大気を湿らせながら、人は農作物を作り、貨幣とも交換できる。暮らしに必要な建物や家具、道具類もまた、水その他の無生物から体をつくる生物を材とし、すべて自然から得て、人間は生き、暮らしを営んできた。水は人間にとっての薬も育む。生命をつかさどるのは日と空気と水と土なのだ。

水循環は信仰の体系にも重ねられ、菌田稔・社叢学会理事長は水循環と信仰の体系を「風土の原空間」として整理している。水源から水分、山口、御県へと序列があり、古川祭もまた、飛騨一之宮神社を最上位の水分神とする信仰形態の中に位置づけて行われる。人々は山の神を里へ迎えることと、春を迎える楽しみをあわせて祭りを行う。文化の面においても風景は深く結びつく。

2001年、旧古川市は「朝霧たつ都」を目標に定めた。朝霧は、市街化の抑えられたこの地に残る盆地霧と、都は奈良、京の造営に先人が匠として加わったことに由来する雅な文化を、それぞれ表している。飛騨市に合併後も朝霧たつ都の保持と進展を目指した事業を農村環境デザイン製作と位置付けて実施している。風景は土地の自然とともに生きることによって作られてきた、風土を知るための資料である。朝霧が発生する気候や地形などの条件をはじめ、朝霧が環境に及ぼす影響など、朝霧について学び、朝霧を守るという視点を政策の基礎としながら、風景を整えていく。地域に根差した研究者たちに調査を依頼し、情報を交換しながら、深く知り、検証し、共有することが大切である。風土を知り、愛眼をもって関わることで、人々をつなげ、経済の活性化につながっていく。

風景を資本として、それを守り、発展させていくことを、各分野の方々に調査、意見を依頼し、共同研究のように風土を探りながら、研究と技術の関係を整理する発想を得たことで、今後もこの実証研究の検証方法を開発、提案していきたい。とのことであった。

（文責 渡邊節子）

次回予告【第66回関東定例研究会】

- ◆日 時：10月3日(土) 14:00~16:00
- ◆場 所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念2号館1階 2104教室
- ◆テマ：木々も命あり ー山川草木悉皆成仏ー
- ◆講 師：佐野 賢治（神奈川大学経済学部教授）

事務局から

- 本学会設立当より、理事、副理事長、顧問としてご尽力いただきました奥富清先生が6月にご逝去になりました。明治神宮の社叢調査や小笠原諸島の世界自然遺産への登録(2011年)に取り組まれるなど、多く優れた業績を残されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。
- 下記の通り、『社叢学研究』14号への投稿を募集しています。研究者の業績評価にもつながりますので、ぜひご投稿ください。また、論文には至らない準備段階の研究ノートや、短報などもご投稿ください。さらに、身近な活動のほか、社叢の訪問記(紀行文)などもお待ちしております。
- 前号にて、「鎮守の森便り」を季刊とすることをお知らせいたしましたが、1面に記しましたとおり、ご寄付を頂戴いたしました。若干を通常事業に使わせていただくこととし、当会報はこれまで通り、年に6回、奇数月の発行いたします。
- 中部定例研究会では、5年間にわたった石徹白杉(国指定特別天然記念物)、スギ境内林(岐阜県指定天然記念物)、後背林のブナ林等の調査研究成果を踏まえて、社叢の診断と管理技術のあり方を学ぶと共に、地元の社叢愛護会と

学会との協働のあり方を議論いたします。中部地区在住の会員の皆さまには詳細を同封いたしますが、それ以外でご興味の向きは、ホームページをご覧ください。事務局までお問い合わせください。

編集後記

いやあ、何とかなるもんなんですわねえ〜。事業縮小!の悲壮な決意を固め、出稼ぎに行こうかと思っていたらば! 何と! 5年間にも亘るご寄附が! 何とありがたい! やきもきしてソソったよ。恐るべし、オトコ脳。

しかし! この使い道決定の速さは何なんだ! まるで巣で口を開けて親鳥からのエサを待っている雛鳥ではないかっ! あれよあれよという間に福島に行っちゃったよ。まさにオアシですな。先が思いやられる。。。とはいえ、宿願かなって大張り切り!には、ええよ、ええよ、がんばっといで!の気分。いかんいかん! 油断せずに財布の口をしっかり閉めとかなきゃ!

ともあれ、絶賛発行ちう(?)の本紙の発行回数を減らさずにいけそうなのは、種種ご案内のタイミングに鑑み、大変ありがたい。だがしかし! 9月末までヒマ〜〜と思っていたのに、テープ起こしやら編集やら! おとっとではないかっ。(藤岡 郁)

次回予告【第35回中部定例研究会】

- ◆日 時：9月26日(土)・27日(日) 1泊2日 ※ 26日13時に神社前集合
- ◆場 所：白山中居神社(郡上市石徹白)
- ◆テ マ：社叢管理の技術課題〜スギとブナ林を対象に(実習と研究会)
- ◆報 告 者：郡上市教育委員会・調査専門部会長・愛護会長・調査員代表
- ◆総括評価：岐阜県教育委員会(記念物担当)
- ◆コーディネータ：林 進(社叢学会副理事長・岐阜大学名誉教授)

共同開催＝石徹白地区、郡上市教育委員会

掲 示 板

『原稿募集!』

『社叢学研究』第14号への投稿：論文、研究ノート、短報、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)と「鎮守の森の活動報告(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など)」「社叢訪問記」(各1,200字程度)を募集いたします。締め切りは、論文等10月30日(金) 活動報告等12月25日(金) いずれも必着。

* 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL 075-212-2973 FAX 075-212-2916
URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内
TEL 080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com